

# 小田原史談

第 143 号  
発行所 小田原史談会  
小田原市栄町2-13-20

## おひつじさまの多胡碑

一昨年の秋、当史談会の上州路史跡めぐりで訪れた多胡碑を改めてここでとりあげてみたい。今年の干支は未で、ひつじに、いささか、かわりあいのある碑だからである。

その碑のある場所は、群馬県多野郡吉井町。土地の人からは、羊太夫の墓と信じられ「おひつじさま」と崇められてき、羊太夫の伝説もあるようだ。

多胡碑は、下野国(栃木県)の那須国造碑と陸前国(宮城県)の多賀城碑とともに日本三古碑の一つとして数えられ、金石文として極めて価値が高く、国の特別史跡に指定されている。

碑は、鉄筋コンクリートの覆堂の中に収められていて、ガラス越しに眺められるようになっていて。等石と碑身から成る碑は、石英の粒が混ざった凝灰岩で、碑身の高さは一・二六糧、幅は六〇糧。六行八十文字から成る碑文の中に、問題の羊の文字が彫られている。

弁官符上野国片岡郡緑野郡甘良郡并三郡内三百戸郡成給羊成多胡郡和銅四年三月九日甲寅宣左中弁正五位下多治比真人太政官二品種積親王左大臣正二位石上尊右大臣正二位藤原尊

この碑文の羊の読み方には、昔からいろいろな説があった。

半とか手を誤って彫んだという誤字説、群、祥、祥の略字説、上野国府の所在地から南々西の未の方向に建てられているという方角説、果ては、新郡を設置する際羊を給したといった飼育説などの見解が入り乱れていた。これらの説に終止符をうったのが、群馬大学の尾崎喜佐雄博士の人名説で、無理のない解釈と受けとめられるようになった。また、羊と記された上野国分寺の文字瓦や、旧多胡郡内の土地から奈良時代のもので考えられる「羊子三」の文字瓦が出土し、人名説に有力な資料となっている。以下尾崎博士による読み方を記そう。

弁官の符に、上野国の片岡郡緑野の郡、甘良の郡并に三郡の内三百戸を郡と成し、羊に給して多胡の郡と成すあり。和銅四年三月九日甲寅の宣なり。左中弁は正五位の下多治比真人太政官は二品種積親王、左大臣は正二位石上尊、右大臣は正二位藤原尊なり。

〔註〕弁官の符 太政官に置かれた事務局の下達文書。

〔註〕左中弁 太政官左弁官の次官

〔註〕二品種積親王 知太政官事の種積親王のこと。知太政官事は、奈良時代、大政大臣がいなかった場合に設けられ、大政大臣あるいは左右大臣に準ずる地位とされ皇族がこれに就任

〔註〕左大臣正二位石上尊 左大臣石上朝臣藤原呂のこと

〔註〕右大臣正二位藤原尊 右大臣藤原朝臣不比等のこと

多胡郡が新設されてから、五十五年後の天平神護二年(七六六)には、多胡郡に居住する新羅人牛足等百九十三人に吉井連の姓を与えられていることが、古い時代の歴史書『続日本紀』(続紀)にのっている。

これほど大勢に姓をいっぺんに与えることは、史上異例なことである。それも、渡来人たちは、蚕を飼う機を織る業など、進んだ農業の仕方を知った、すぐれた文化をもった人たちだったからであろう。

話はおと先になるが、『続紀』の和銅四年三月辛亥(六日)の項に、六郷をさいて新たに多胡郡を置いたとある。多胡碑は同年三月九日、三日のずれがあるが、六日は建郡が決定された日、九日は施行のため下達文書を発した日と解されている。

ともかく多胡碑は、渡来人のための新しい郡が設置され、羊が郡司に任命された、その喜びを長く伝えようと、新羅人自らの手により建てられた、モニュメントにはかならない。



多胡碑拓本

# 多胡碑にかかわりのある郷土の人

## 尾崎喜佐雄と岡本隆徳

古碑には、ときに後年の擬作があるが、尾崎喜佐雄博士は、多胡碑の建立年代を、後年のものでなく、多胡郡創設頃のものであると実証されている。この点について、『多胡碑のはなし』(橋爪聡著 吉井町教育委員会発行)に手ぎわよくまとめられているので、それを引用しよう。

さて、現在というまことに、さまざまな研究を発表されておられます。ですから碑の石質、石の扱い方、加工技術等からみて、多胡碑が八世紀初めのものであることを証明されておられるのであります。

尾崎喜佐雄博士は、古墳の石室の用石の扱い方や、その加工技術の研究から、多胡碑の寸法にふれて、碑身の高さを除いて他はいずれも三〇厘の倍数になっていることに注目され、これは八世紀初めに採用されていた唐尺で造られていることを指摘されており、更に碑身の高さは、笠石の軒幅の二倍で計画

群馬県は古墳の多いことで全国有数の県であり、昭和十年の調査では約八千四百、実数は万を超えていたのではないかといわれる。尾崎博士は「古墳から見た東国文化」の論文を東京大学に提出、昭和三十一年三月、文学博士の称号が与えられているが、それだけに群馬県の古墳や墳墓の発掘を数多く手がけ、その調査報告書は八十編を超える。多胡碑の建立が八世紀のものであると、はっきり指摘できるのも、尾崎博士にして初めて出来得ることであろう。



在りし日の尾崎喜佐雄博士

ところで、尾崎博士が山北町出身で、群馬県古代史研究の第一人者で大きな功績を残していることが、郷土の人にはほとんど知られていない。そこで尾崎博士の略歴と主な著

書を次に紹介したい。

〔略歴〕 明治37年5月30日 神奈川県足柄上郡川村(現山北町)

大字川村岸三三番地に生れる。同38年 大字川村山北二五九八番地(現山北町)に転居。大正12年3

月 神奈川県立第一横浜中学校卒業。同15年3月 静岡高等学校卒業

業。昭和11年3月 東京帝国大学文学部国史学科卒業(静高卒業後、

同8年東京帝大入学迄の間、東北帝

大法医学科、九州帝大法医学科卒業、

同学経済学科学科入学経緯・退学、兵役

などの履歴がある) 同12年10月 15年10月 応召軍務に服す(陸軍

工兵中尉野戦作井中隊長)。同17年

8月 群馬県史跡主事。同18年2月

群馬県師範学校教授嘱託(19年9

月教授)。同20年1月 8月 応召。同24年7月 群馬大学教授。同

37年3月 文学博士。同45年3月

群馬大学退官。同4月同学名誉教授。同47年 群馬県置置百年記念県政振

興功労賞、前橋市制施行八十周年記念市制振興功労賞受賞。同53年1月

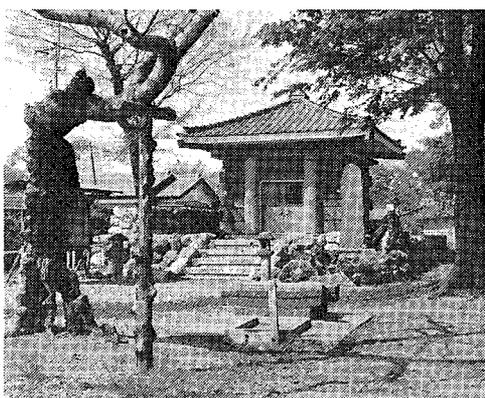
4日死去。この間、県内外の短大・大学の教授。講師、群馬県の、史蹟

名勝天然記念物調査委員、文化財専門委員、遺跡台帳作成委員長、県史編纂専門委員等、前橋市の、市史編纂委員、文化財調査委員など、それぞれ歴任。また、数多くの古墳、遺跡などの発掘を手がけている。

〔主な著書〕『古墳のはなし』(昭和27年 世界社)、『横穴式古墳の研究』(昭和41年 吉川弘文館)、『多胡碑』(昭和42年中央公論美術出版)、『上野国の信仰と文化』(昭和45年 尾崎先生著書刊行会)、『前橋市史』第一巻(昭和46年 前橋市史編纂委員会)、『上野国神名帳の研究』(昭和49年 尾崎先生著書刊行会)、『群馬の地名』上・下(昭和51年 上毛新聞社)その他、著書六十点、雑誌等に発表の論文および小篇は二百五十数点に及ぶ。

もう一人多胡碑とかかわり合いのある郷土の人として、書家で著名な岡本隆徳(号は碧殿)を挙げねばなるまい。

彼のことにについては、中野敬次郎先生は『小田原史談』第二三三号(昭和六十二年一月発行)に「秋暉の絵と碧殿の書」と題して次のように述べ



多胡碑覆堂



# 材木屋綺談 その二

## たかた・きくせん

柿は実を食べるだけが効用ではない。その樹幹もまた銘木用材として珍重されるので

ある。柿の木を伐り倒すと美しい黒色の層が樹幹を縦に太く走って倒れるのを見るのが面白い。業者はこれを黒柿と

称して高く評価する。銘木黒柿はその黒色模様を利用して、床柱や框、落掛に仕上げると何とも言えず華麗である。小さなものは鏡台の椽や箆筥に使用するが、いづれも高価なものである。土地によっては目方で売買する所もあると言う。亦箱根物産の木象簾や寄せ木細工に黒色として使うと一層効果が著しい。

しかしどの柿の木でもみんな黒色を蔵している訳ではない。渋柿に多いと言われるが伐り倒してみるとそうとも言えぬ。だから柿の木を買うことは業者にとって賭けをするようで不安もあり、若し黒柿であればその儲けも大きい。小田原地方で私は柿の木を何本も

伐ったが、黒柿にはなかなか打ちあたらなかった。そこで材木業者は所有者に隠れて根本にそと錐をもみ、その木屑の色で黒色を確かめる。ところが黒柿だと信じて倒してみると、黒は根本だけで五十センチも上るとスッと細くなって消えてしまうこともある。これでは折角期待したのに儲け損ってしまふ。

黒が出なかった柿は白柿と呼ぶが、柿の樹肌は固くて艶があるので、これを仕上げで蠟で艶出しすると結構見られるのである。そこで削った白柿に濡れ雑布で湿りを与え、その上に墨で上手に模様を描いてぼかしてゆくとホンモノそっくりの黒柿に見えてくる。私は

この作業を屢々体験した。ニセモノの黒柿床柱は安価で売れるので安物の普請にはよく売れたものである。東京の専門問屋から送られて来る床柱にはこの手描きの床柱が多かったものである。

さて信州には柿の木が多いが、一度信州から白太を削りとった太い黒柿をまとめて買ったことがあるが、これはまた黒の縞模様が目状をなしていて頗る美麗絢爛でこの黒柿では大分儲けさせて貰った。この黒柿で茶室用の「炉ブチ」を造った茶人があったが、まことに何とも言えぬ気品があって、売手ながら目の法案をさせて貰ったことを今でも覚えてる。

(岡部忠夫)

### 柿の木の話

柿は実を食べるだけが効用ではない。その樹幹もまた銘木用材として珍重されるので

称して高く評価する。銘木黒柿はその黒色模様を利用して、床柱や框、落掛に仕上げると何とも言えず華麗である。小さなものは鏡台の椽や箆筥に使用するが、いづれも高価なものである。土地によっては目方で売買する所もあると言う。亦箱根物産の木象簾や寄せ木細工に黒色として使うと一層効果が著しい。

伐ったが、黒柿にはなかなか打ちあたらなかった。そこで材木業者は所有者に隠れて根本にそと錐をもみ、その木屑の色で黒色を確かめる。ところが黒柿だと信じて倒してみると、黒は根本だけで五十センチも上るとスッと細くなって消えてしまうこともある。これでは折角期待したのに儲け損ってしまふ。

この作業を屢々体験した。ニセモノの黒柿床柱は安価で売れるので安物の普請にはよく売れたものである。東京の専門問屋から送られて来る床柱にはこの手描きの床柱が多かったものである。



多胡碑

られてる。………隆徳の書は独学で六朝を学び人呼んで碧巖派という独特の書法であった。最も有名な作品は、明治三十年東京宮城二重橋『小田原近代百年史』(中野敬次郎先前的楠木正成銅像の碑文で、依

頼をうけて三年、臨書一千枚にして成った逸話は有名である………

ところが、なんと、隆徳が臨書に多胡碑銘を模したと、片岡永左衛門が、その日記に記しているではないか。その点、隆徳について詳述の『小田原近代百年史』(中野敬次郎先生著)は触れておらず、興味深く、若干のくい違いがあるが、『片岡日

記』の記録をそのまま紹介したい。

………旧友田中保之氏ニ久々ニ面会、談書道ニ及シニ先年住友家ニテ出資シ宮城前ノ楠公銅像建築ノ事トナリ肝煎セラレシハ品川弥次郎子(爵)ニテ当時属官ナリシ田中氏ヲ呼ビ今回弥々楠公銅像ノ建築セラル、モ此銘之書ク者ハ其人物素行ニ留意セルニ或者ハ杉孫七郎ト云者有モ彼ニ銅臭(金錢にとらわれた人をさげすむ云々)甚シク爲ニ拙者ハ不好、岡本隆徳氏ニ依頼シ度ク同藩(旧小田原藩士)ナレハト中介ヲ託サレシモ岡本氏ハ富豪権家ヲ好サレハ如何ト不安有リシモ依頼ノ旨ヲ談セシニ心ヨリ承引シタリ氏ハ格別ノ銅像ナレハト多胡碑銘ヲ床ニ掛ケソヲ模シ六百枚ノ下書シ始テ書掲ケタルニ子爵死去サレ銅像ハ出来テ潤筆料壹百円ヲ送ラレシニ子爵ノ推選シタル片岡正次甚タ経(軽)少ナリト住友氏ヲ怒リタルモ子爵ハ逝去ノ後ナレバ如何トモナシ難カリシ岡本氏ハ片岡氏ヲ慰テ曰ク元來潤筆料ヲ希望シテ書セシニモ非ス別ニ不平ナシト其金ニテ赤松式本ヲ買求メテ庭前ニ植タリト

# 小田原叢談(三)

## 石井富之助

### 小田原駅周辺

#### 大正初期の緑町

何百年という小田原の歴史の中で、小田原駅の周辺ほど大きく変貌したところはない。これは大正九年(一九二〇)に熱海線小田原駅が開設されたのに伴って起こった現象であるが、早いものでもう七十年も経ってしまった。半世紀以上もむかしのこととなると、わからないことがいろいろでくる。八十歳以上の人ならみんな目で見て知っているはずで、人にいわれるとあそこだったと思いきのことのできるが、それをまとめて話す人は少ない。そのころの地図も勿論あるが、地図だって万能ではなく細かいことはいちいち説明してもらわなければならない。そんなわけで、わたしのところへそのころの様子を聞

きにくる人も相当いる。

それで見たまま、覚えて

いるままを書きとめておく

気になった。

緑町——だいたい今の

栄町と城山の一部と思っ

てもらえばよいが——とい

うと、旧緑新道、須藤町

(銀座)、竹の花、広小路、

それから西に駅前、駅裏、

八幡山へかけての町名で、

一丁目から四丁目まであ

った。

そのころの緑町一帯は、

ちゃんとした町並みを形成

していたのは須藤町から広

小路へかけてのいわゆる甲

州街道だけで、その裏側に

なる駅前、駅裏は樹木か竹

やぶでおおわれているか、

それでなければたんぼで、

緑町という名がびったり当

てはまるようなところであ

った。

さて、どこから説明して

行こうか。まず駅裏、新幹線の駅の前に山がある。この山を愛宕山という。山の上に愛宕神社があったからだが、この神社は今の谷津の大稲荷神社に移されている。

愛宕山は東へのびて、ちょうど駅のところに神奈川県立小田原中学校(今の小田高)の校舎が建っていた。

校舎は丘の上であり、南に坂を下ると運動場になっていて、正門は駅前広場拡張前のあさひの西はずれのすぐ前あたりにあった。昭和三十年頃まであさひの前に

一本の枝ぶりのいい松があったが、この松が正門の横に植わっていたもので、駅ができた時二メートルばかり

北へ寄せて植えかえたという記録がある。はじめのころは駅前に美観を添えるもの

のだということで、杉田初代駅長からこの植え換えをやった小田原保勝会に對して感謝状を出しているが、

駅前が混雑してくるとだんだんじゃまになり、とうとう取拂われてしまった。

小田中は大正三年三月十一日に大火事を出して、校舎の大部分を焼いてしまった。わたしの家は銀座通り

にあったので、それ火事だというときみな大屋根に上って見たが、炎が夜空に高く燃えあがり、火の子が頭の上に降ってくる。いやものすごいなんのって、歯をガクガクいわせながら見ていたのを覚えている。小田中は火事で焼けたのと、

多分そのころにはここが駅の敷地になるときまっていたと思うが、それやこれやで同じ年の

六月に八幡山へ移転した。

校舎の東の端にえのきの大樹があった。ここが昔の新蔵のあとで、

そのすぐ下に南北に通じる細い道があった。

これが広がって職業安定所前の通りになっているのだが、その職業安定所は今ではお堀端の税務署

あとに移転している。

道をはさんで大えのきの東側は永久寺(今は谷津に移っている)で、ここに北条氏政、氏照の墓(現在地と同じ)があり、この丘がさらに東にだんだん低くなって裏町まで続いていた。

一方、銀座通りの駿河銀行前から駅へ行く道、すなわち錦通りへの入口の南側角(今は道になっている)に

### 鉄道開通祝賀記念



錦織神社があった。これも現在は大稲荷神社に移されているが、その北側に二メートルか、せいぜいどぶ板ぐらゐる三メートルぐらいの横町がついていた。錦織神社の横の道だから「にしこりよこっちょ」というていた。

この道はだいたい錦通りと同じ曲線を描いて駅前に出、あさひの前を通過して裏へつきぬけ、城山中学校の北のげ下のところへ達していた。その切れっぱしが今でも残っている。この辺を揚土あげつちといっていたが、小田中と反対側に、南は青橋あおはしまで西は八幡山の東斜面へかけて、辻村常助さんの経営していた辻村農園があった。いろいろな木が植えてあり、そのどれにも名札がついていて、農園というより植物園といった方がふさわしいものであった。八幡山の東斜面は西洋草花が多かったようである。幸町の電車の停留所とまりのところはガラス張りの六角の建物を作り、そこでこの鉢植はちうゑえの草花を売っていた。

橋もできていた。だから、青橋をまわり、今と同じように城山中学校下の道へ入り百段坂を上って行ったのだが、その上り口の左のげの上に辻村伊助さんの木造二階建の洋館があり、右のげの上には伝染病の隔離病舎があった。時々、農園を斜めにつぎつぎと近道をしたが、辻村さん一家が庭の円テンプルを囲んでコーヒを飲んでいるのをよく見かけたものであった。駅になったのだからしかたがないが、今この農園が残っていたら教育的にも大きな価値があったものをとまことに惜しい気がする。この時、農園は威張山いばりやまへ移転したのである。辻村伊助さんも湯本へ移転したが、関東大震災の時、山崩れで一家全員なくなられた。

また揚土の突きあたり、城山中学校のこのげ下は平地になっていて、その南側に物産陳列所、北側に足柄下郡立図書館が御大典記念事業として建設された。銀座通りの裏のダイヤ街は下幸田、もう一つ駅寄りのお堀通りは上幸田といつた。下幸田は錦通りから駅前までの名前で、それから先の小林病院の前は野道といつてよいような細い道になっていた。

幸町方面からくる駅前通りの元の道は郵便局の前で行きどまり、郵便局のところに松琴楼松の湯があり、その横を上幸田へ出る道があった。松琴楼の裏に小さな田があったから、たんぼ道といつてもよいものだった。駅前通りが大曲りに曲っているあたりは市の駐車場も含めて原っぱになっていて相馬屋敷と呼ばれていた。下幸田も上幸田も、ともかくこの辺一帯はどこの家でも生垣、竹垣をめぐらし、庭木がいっぱい繁っていて、木の中に家があるといった感じの、ひっそり閑とした屋敷町だった。

また、竹の花の裏通りになる裏町うらまちもうらぶれた町筋で、小田中の丘から少年院にかけてはほとんどたんぼであった。

小田原駅開設以後

大正九年十月一日、小田原町民待望の熱海線小田原駅が開通した。

熱海線は、大正七年に丹那トンネルの工事がはじま

なる支線として考えられたものではなく、最初から丹那トンネル開通のあかつきには東海道本線に切りかえるということを前提として計画されたものだと思う。

駅をどこに作るかということについて、町民の方から須藤町、竹の花の商店街の真正面にあたる広小路にしてほしいという要望が出たと聞いているが、そこにすると第一に人家が多く買収に困難があること、第二に駅を出るとすぐカーブになる、そういうところに広い構内を持つことはむずかしい。それにくらべれば、たんぼと小田中の跡地と辻村農園とが敷地の大部分を占める現在地の方がはるかにまさっていることは、だれの目にも明らかで、ここが選ばれてのはむしろ当然であったといつてよいであろう。

駅まで持って行ったままのこの新道です。これができると、酒匂、山王のように小田原と国府津との中間地点の住民にとっては逆に不便になったであろうが、国府津小田原間の電車は廃止され、そのかわりに市民会館から駅前までの電車線が敷設された。

駅前広場は、旭丘高校へ行く道(お城通り)とあさひの横の道にはさまれた三角地点に、一階を富士屋自動車庫にした富士屋レゾート、それに続いてあさひができ、駅の真正面は今よりもぐっと手前、元職業安定所前通りとほとんど一線をなし、南から伊勢竹、箱根物産の天野屋(後に電気会社の事務所になった)美濃政などが並んでいたように覚えている。また現在の広場北側の各自動車会社の事務所のあるところに、電車の発着所ができて形が整えられたわけである。

伊勢竹の東隣りに、屋根に塔をのせたちんりうも開店したが、その斜め東寄りあたりで電車線路が二またにわかれ、客車はちんりうの横から美濃政の裏をまわって発着所へ、貨車はあさひ

# 近代小田原百年小史稿(一)

高田喜久三

の前を通過して貨物ホームへ行くようになった。

この小田原駅開通は、明治二十年国府津駅開設、明治二十二年の東海道線全通の時以来、小田原町民の待ち望んでいたものであったから、その喜びようといったらなかつた。それが全町を挙げてのお祭りになったわけである。わたしの知っている限りでは、大正四年の御大典祝賀の祭りと駅開通の祭り、この二つが一番大きいものだったと思うが、だし、やたいが二十台以上も駅前広場に勢ぞろいした時の壮観は今でも目に見えるような気がする。各町内はそれぞれ趣向をこらした

今年「平成二年」は小田原市制五十周年である。市ではこれを記念していろいろな行事をくりひろげている。しかし今から五十年前とは昭和十五年であるから、小田原が歩んできた長い歴史から見ればほんの一時期である。近代小田原史を考えるときには少なくとも明治維新(一八六八)から始めねばならない。そうすると今から百二十一年前のことである。この稿は誌面の都合上詳述することが出来ないのが残念だが、百二十二年の概況は述べられると思うので、これから小田原近代百二十二年の歩みのあらましを眺めてみようと思う。

## 一、明治期の小田原(一)

### 灰色に閉ざされ遅々として 進まぬ町の発展

町飾りをし、特設舞台を設けて余興をやったりしたが、特に呉服屋は当時浅草の花屋敷の生き人形で人気を博していた安本龜八を呼んできて、思い思いの飾り物をしたほどであった。ともかく町中どこへ行っても催し物をやっているというたいへんな祭りであった。

そこで須藤町の有志が発起人となって錦織横町の拡幅が計画され、現在の四間(七メートル余)道路ができ

あがったのが大正十年ごろだったと思う。できるだけまっすぐな道路にしたかったのだが、土地の提供に應じないものがいて、結局は現在のように曲りくねったものになってしまったのである。

この道の完成によって、駅と緑町、新玉町とが結ばれたのであるが、後に錦織横町の錦をとって錦通りと名付けられたこの道路が、小田原で最もにぎやかな商店街になろうとは、その時には夢にも思わないことであった。

けで、あとはなかなか家が建たずほとんど空き地ばかりであった。そこへ大正十二年九月一日の関東大震災が起った。地震のあとで各所に火事が発生し、町の中心部は全部焼け野原となったが、須藤町が焼け境で、わずかに報徳綿井上商店一軒だけが類焼をまぬがれた。しかし、錦織横町が広げられていたために、須藤町の人たちはいくらかの商品家財も出せたのであって、もしむかしのままの道だったら、おそらく身一つで避難するしかなかったらうと思う。

震災後、小田原の主要道路が拡幅されて現在に至っているが、小田原の発展はこの小田原駅開通と大震災とを起点として始まっているといつてよいようである。

鐵を集めて交通の要点となり、乗降客も年々増加することになったが、これに伴って駅前にもようやく商店が建ち並び、また裏町と職業安定所前通りとの中間地点が震災後第二指定地に指定されたため、宮小路界内には及びもないが、ここには新しい花柳界ができ、裏町はカフェ街となって様相をガラリと一変させた。

その後、昭和三十一年に駅前広場の拡張が行われ、箱根登山デパートその他の高層建築が建てられて面目を一新したが、昭和五十一年十一月、さらにまた広場の拡張と地下街の建設が行われた。一方、反対側の新幹線駅前には愛宕山をたちきって広場が造成され、十三階建の新幹線ビルがそびえているが、さてこれから、小田原駅周辺はどのようにならうか。

(続)

つまり、小田原駅は箱根方面への小田原電鉄と大雄山電車と小田急の三つの私

慶応四年(一八六六)、この年の十月から明治と改元される(有栖川宮を総督に戴く)江戸攻撃の東征軍の先発隊が小田原に到着したのは二月二十八日である。折りから小田原藩大久保家は四国高松の松平家から迎えた養子の藩主忠禮はまだ年も若く、藩主を取り巻く譜代の重臣たちは、突然降って湧いたようなこの急情勢に為すすべもなく、大勢に逆らえずして官軍に恭順を誓ったのである。にもか、わらず五月二十日に到って幕府支援の林昌之助を首領とする遊撃隊が、真鶴に上陸して小田原に来るや、これを迎えて官軍に叛旗をひるがえそうとしたのである。幸いこの事件は急を聞いて江戸藩邸から駆けつけた監察職中垣秀実謙齋の必死の説得によって事無きを得た。しかし小田原に入った脱走隊排除の戦い、いわゆる戊辰箱根戦争では小田原藩士も多数戦死、責めをとって家老の岩瀬大江之進は自ら割腹し、全じ家老渡辺了叟は江戸総督府に召喚され、結局君命により切腹、官軍監察を殺害した家臣二名は江戸に送られて斬首の刑に

処せられた。そして藩主忠禮は蟄居、十一万三千石は召し上げられた。のち親藩荻野山中藩から岩丸少年を迎えて、藩主忠良と呼び七万石は返されたのである。しかし明治二年には早くも版籍奉還、やがて廃藩置県となって小田原藩は滅亡、小田原原と替る。だがこの小田原原もすぐに足柄県となり、明治八年には今日の神奈川県の中に組み入れられるというあわただしい経過を辿ったのである。

以上過程のように小田原藩は心ならずも朝敵のそしりを受け、旧大久保藩、すなわち小田原の人々は、常に明治政府の外側に立たされて冷飯を食わされたことは事実である。全時にこの時代の明治小田原人は箱根戦争のことに触れることをタブーとしてことさらに避け、こんにちでも維新の際の小田原の史実を知らぬ市民が多いのである。ともあれ、明治初年の小田原は灰色にくすんだ活気の無い町に陥ってしまった。それもその筈、藩の消滅と箱根関所の廃止は、小田原宿の経済基盤を根底から覆し、士族はじめ町人たちの

困惑と困窮はおよそ想像出来るのである。こんな中で小田原の人々は新しい道を模索して、明治八年には新しい自治組織が作られた。すなわち、緑新玉、万年、幸、十字の五町を作り、それぞれに戸長が任命された。その内容をみると旧士族と有力町人がそれらの役職を占め、この点からも明治政府の改革策の一つである四民平等が実現されたことが判る。この当時の小田原の全戸数はおよそ三千、人口は一万三千である。これらの五町は幸町に合同の町役場を造ったが、明治二十二年、憲法が發布され、市町村法が施行されると、右の五町が正式に合同してはじめて市町村法による小田原町が誕生したのである。同時にこの時、板橋、風祭、入生田、水の尾の各村が合併して大窪村に、中島、町田、池上、荻窪、谷津の五ヶ村が合併して芦子村となったように、小田原周辺の多くの村々が合併して新しい村を作った。小田原町の初代町長は今井徳左エ門で、小田原町議会議員二十四名には、鈴木善左エ門、江島平八、片岡

永左エ門、今井広之助等々、のちに小田原町政に大きな足跡をのこした人々の名が連なっていて、三百年の封建体制が潰れ去ったあとに、自然発生的に人民の自治活動が芽生えはじめたことがよく判るのである。なお町役場庁舎は幸町に造られた。現在の市民会館の在る処である。この建物は一九二三年大正十二年の関東震災まで存在した。

明治日本の進路は、幕藩体制を一挙に覆して、近代日本建設のために政治経済はもろろんのこと、教育宗教、医療等の広い分野にわたって新しい基礎を造ることであった。四民平等、欧米文化の摂取、小学校の義務教育、さらに国民皆兵制度等々、明治の人々にとつて今日は昨日の今日に非ず、明日は今日の明日に非ずと言った、文字通りの日進月歩の変革の中をさまざまと言つてよい。

小田原の人々にとつても同様である。明治五年には旧藩が廃されて太陽暦となり、このときにはすでに小田原のお城も取りこわされて姿を消し、翌六年に国民皆兵、徴兵令が施行されたのである。そして、明治七年には国営の富岡製糸工場へ、小田原の士族の子女十一名が選ばれて派遣され、明治八年には辻村甚八郎らの力によって小田原で初めての銀行「積小社」が開業する。この年には小田原から湯本山崎まで人力車の通る路が開通する。それ以前までは人力車も満足に曳けぬ悪路が東海道であったのだ。事実、その頃の写真をみると、松並木の太い根が道路を囲いまわり、輪のある車が通れなかった事情がよく判るのである。

明治十年、西南の役ではかつての小田原藩主、もとのお殿さま大久保忠良が伍長で戦死したことが報ぜられている。明治日本は明治十年の内戦終息を機として俄かに、近代化への歩みを速めるのである。(続)



## 山上宗二と千利休

小田原北条四百年遠忌記念講話

岩崎宗純

隊としまして、前田利家と  
か上杉景勝が群馬の方から  
関東に入って来るというこ  
とで、秀吉軍の北条軍への  
総攻撃が始まります。

まず最初の対決は、この  
箱根山の向こう三島下りに  
あります山中城で第一戦が  
交えられました。

残念ながら小田原合戦は、  
秀吉が京都を出発する時に  
決った様なもので、圧倒的  
な軍勢力からしてすべてに  
北条氏とは格差があるわけ  
です。おそらく秀吉も満々  
たる自信を持って京都を出  
発したと思います。そうい  
うことで秀吉は京都を出発  
する時に、旅の慰めとして  
自分の周辺に連歌師とか能  
役者或は茶道者を引き連れ  
ています。その中に千利休  
もいるわけです。

一方北条氏は、いずれは  
秀吉軍と天下分けめの戦い  
があると予測して、本城で  
ある小田原城の大改造をし、  
周辺の城々の中でも箱根は  
昔から自然の要害でして、  
そこを押さえ込めば、小田  
原には秀吉が入って来られ  
ないであろうという目論見  
がありまして、足柄城、山  
中城、韮山城の三点を結ぶ  
ところで秀吉の大軍を押さ

え込もうとしたわけです。

天正十八年三月二十八日  
に秀吉軍の総攻撃が始まっ  
て、その最大の防衛拠点で  
ありました山中城は、翌日  
正午にはあっけなく落ちて  
しまいました。秀吉の大軍は  
更に四月一日に箱根山に入  
ります。箱根山の前期外輪  
山、後期外輪山にあった山  
城、鷹巣城、湯坂山城、宮  
城野城、塔の沢城等も瞬く  
間に落ちてしまいました。

天正十八年四月六日に秀  
吉は湯本に入り、こゝ湯本  
の早雲寺に本陣をおきます。

しばらくここに本陣をお  
いたまま、こゝから斜め上  
にあります石垣山に、小田  
原攻めの本拠地として「一  
夜城」の構築にかかりまし  
た。

宗二、早雲寺へ

利久を訪ねる

秀吉が早雲寺に滞在する  
間、同道してきました千利  
休も、この寺に滞在してい  
たのは確かであります。

そこへ訪ねて来たのが、  
山上宗二という茶道者であ  
ります。宗二は千利休の高  
弟ですが、秀吉に追放され

北条氏を頼りに、天正十六  
年以後小田原、箱根の周辺

でお茶を教えておりました。

千利休の一番弟子と言われ  
ていた山上宗二が、早雲寺  
在陣の千利休を訪ねてきた  
わけです。秀吉の怒りに触  
れて追放されていた山上宗  
二も、おそらくこの時、利  
休のとりなしで秀吉と対面  
できることになり、和解の  
しるしの茶会でもあった事  
でしょう。ところが、その  
茶会で又も秀吉の怒りを買っ  
て、今度はその席上で耳鼻  
を削がれて、惨殺されてし  
まうという悲劇がおきまし  
た。

それについて当時の記録  
ではありませんが、江戸時  
代寛永十八年(一六四一)に書  
かれました「長闇堂記」と  
いう著書の中に「かの山上  
宗二薩摩屋ともいし塚に  
ての上手にて物も知り人  
におさることなき人物なり  
如何にしても面くせ悪く口  
悪しき者にて人の憎みし者  
なり小田原御陣の時秀吉公  
にさへ御耳に当たること申  
してその罪に耳鼻削がした  
まいし」こんなふう書か  
れております。

四月六日に本陣がおかれ、  
その様な惨殺がおきたのは  
四月十一日でした。利休が  
秀吉に同道して来て、この

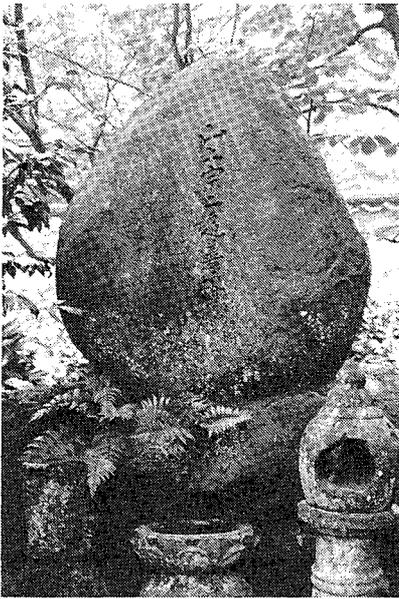
今から四百年前滅び去っ  
た北条氏、その中でも天正  
十八年(一五六)秀吉が小田  
原攻めにやって参りますと、  
さまざまな悲劇がおこりま  
す。その中の一つに、千利  
休の高弟でありました山上  
宗二という茶道者、お茶人  
さんが、この早雲寺の山内  
で秀吉によって虐殺された  
という非常に有名な話がご  
ざいます。その話を中心に  
して、秀吉の小田原攻めと、  
山上宗二、千利休、後に秀  
吉に切腹を命じられ自害し  
て果てる、をからめて、天  
正十八年前後のことを話し  
てみたいと思います。

ご存知のように、秀吉は  
天正十五年(一五六七)に西の  
島津を降し、残るのは最後  
まで敵対する東の北条氏政・  
氏直であると、北条氏にね  
らいをつけるわけです。

秀吉は戦わずして北条氏  
を臣従させてしまおうと、  
家康を使って氏政・氏直の

上落をすすめます。京都に  
やって来て自分の前で臣従  
の礼をとれ、家来になると  
いう誓いをするように、と  
再三催促するのですが、北  
条氏は頑として言うことを  
ききません。そういういろ  
いろな縫れがありまして、  
最終的には名胡桃城事件に  
なりました。その結果、北  
条氏と秀吉とが決定的な対  
立となるわけです。

天正十七年(一五六九)十一  
月二十七日に秀吉は、来年  
には必ず小田原を攻め氏政・  
氏直の首を切るぞという内  
容の宣戦布告状を、北条氏  
や東国の大名にも送りつけ  
ます。そして翌年三月一日  
に秀吉は三万二千の直属部  
隊を率いて、それ以前には  
徳川家康の先発隊三万、近  
畿、東海の諸大名の部下約  
二十一万余とも言われてお  
りますが、その大軍が小田  
原をめがけて攻め寄せてく  
るわけです。その他に北陸



山上宗二追善塔 早雲寺

早雲寺に居るといふ情報が宗二の耳に入り、どういってで密かに本陣まで入って来たのかわかりませんが、とに角なつかしい師匠の利休に逢いに宗二は来たわけです。ところが四月十一日の秀吉のお茶席で、又も秀吉の怒りを買って殺されてしまったのです。

宗二の人となり

では、『長閑堂記』にこの様に書かれている山上宗二とはどういう人物でありどのような履歴の男であったか話してみたいと思います。秀吉の怒りを買った原因が「面くせ悪く口悪きものにて」という事で、なかなか辛辣な言葉を吐く茶道者であったことは想像さ

れます。

わずかに残っている当時の記録や、山上宗二が残した『山上宗二記』という茶道書を読んでまいりますと、なるほど山上宗二とは、相手の感情に逆らっても自分の思った事をずばりと云ってしまふ男だなということがわかります。

『茶道四祖口傳書』の中に山上宗二について、こんな逸話が残っております。曲直瀬家という代々天皇家に仕えた医者がおります。その何代目に当たりましようか。曲直瀬道三の孫の翠竹という人もなかなかのお茶人さんで、「富士茄子」という大変な茶人を持っていました。これは茶道者にとりまして一度は目にした

い大名物で、宗二は是非一度拝見したいと、当時京都御所の司でありました前田玄玄を通じ申し出ます。翠竹から「では、お見せしましょう」と承諾を受け、宗二は喜んで友人である堺の住吉屋宗無という人と曲直瀬家を訪ね、お茶人拝見ということになりました。ところが、宗二はその茶会で亭主の翠竹がお茶を点てた時に、その茶人の置き方が間違っていると云ったのでしよう、その席上で、亭主に振舞い方、茶人の置き方がおかしいのではないかと、ずばり言ってしまったのです。すると亭主の翠竹は大変立腹しまして「是非見せて欲しいと言っておきながら、何事か」と二人を追い返そうとしたということです。

自分の思ったことは、相手の気持や周辺の状況にかかわらず、それがたとえ権力者の秀吉でも、思った事を容赦なくずばりと云ってしまふ宗二の人となりがよくわかる逸話であります。宗二の残した茶道書『山上宗二記』にもいくつか宗二らしい辛辣なことが書いてあります。この本の中に、

その時代の茶道者、茶の湯に親しんだ人々の列伝がついています。その項の中にこんな記述がございます。

下京の茶道者・磯屋宗悟について「目利かぬなり小道具あまた所持よき道具なし」と云っております。つまり、古美術に対する目は、全然よくないし、小さな物は沢山持っているが良い物は何もないということですよ。やはり別の項に、武野紹鷗の一番弟子と言われた辻玄哉については「目も利かず茶湯も天下一の下手なり上手の弟子にても不作意の人は下手なり」天下一上手と言われた紹鷗の弟子でも不作意の人は下手なのだと言って、自分の周辺にいる茶道者に対しても、非常に辛辣な言葉をあびせております。

以上の事からも、山上宗二という人はかなり口の悪い、先程の「口悪しき者にて」とは、こういう事を指すと思いますし、茶道に關しましては自分の思った事を相手構わず、ずばり言うような人間であったと想像できます。

宗二の経歴

次に宗二がどの様な経歴で、生涯はどうであったか、お話ししましょう。

宗二は堺に生れ、堺は千利休の故郷でもありますし、当時の大茶人の今井宗久や津田宗及、いわゆる堺の納屋衆のお茶人たちは、その当時そうそうたるメンバーがおりました。

堺に南の山の上に家があったので、山上宗二と呼ばれていた宗二は、商家に生れ納屋衆と言われた問屋衆の一人でありました。堺でこの様な境遇に生れた人々は、必ず若い時からお茶を嗜む風習があったのでしよう。

宗二が茶湯者として歴史の表舞台に初めて名を表わすのは、永禄八年(二五三)五月七日でございます。宗二は高麗茶碗を披露するために、今井宗久を招いてお茶会を開いた記録が『今井宗久日記』に出ております。このあたり(二十一歳)から堺の茶道界に登場するようになりまます。

その後、千利休に師事し茶道者としての腕を、めきめき上げてくるわけですよ。宗二は、天正元年(二五三)

十一月二十四日、信長が京都の妙覚寺で行ったお茶会に、松井友閑、今井宗久と一緒に招かれております。その後、信長周辺の大名、明智光秀、細川三斎、松井友閑等とも交わるようになり交際範囲も次第に広がっていきました。

更に天下人秀吉との接点はどうかと申しますと、秀吉が天正九年(一五八二)に信長の命令で播磨姫路に出かけている時に、わざわざ今井宗久等と一緒に行って、秀吉の持っていた名器「四十石茶壺」からお茶を取り出し曰で挽いて、お茶会をしている記録が同じ『今井宗久日記』に出ています。翌天正十年(一五八三)になりますと、秀吉は山崎の妙喜庵で今井宗久・千利休・津田宗及と一緒に山上宗二を招いて、お茶会を開いております。当時、堺・京洛

でも名の知れた茶道者であります今井宗久・千利休・津田宗及等の大茶人と一緒に秀吉のお茶会に招かれるという事は、この天正十年の段階で、宗二がそれ等の人々と並ぶ著名な茶道者に成長していた事がうかがえます。

ところが、その翌年から宗二の運命は、だんだん狂い出します。(統)

(反訳 K・T)

## 烏蘇里江(二)

### 翠子の場合

隠岐威重

任地 下八岔子

四日目の朝、荷物を持って河淵に行きました。内地の田舎の川に浮かぶ渡し船のような小舟に、中国人とは違う丸い顔の船頭が波にゆれる船を抑えておりました。漕手二人と私達二人だけ乗せて両手で漕ぎながら後退りする牛くらの速さで黒竜江を河上に向かって出しました。一寸他の船とす

れ違っても沈みそうにゆれます。朝、撫遠を発って六月初旬の日が陰りそうになって、やっとこれから住む夫の任地下八岔子に着きました。

注 下八岔子は撫遠からウスリーの上流六十キロにある小屯。

もう鈴蘭灯もなく、出迎えてくれる日本人もおりません。河淵の家も、物珍しげに集まる人達の服も骨相

も言葉も、今まで南満や華北で見聞きした中国人とはまるで違います。

目がつり上がった丸顔の人達、若い嫁さんをもつ中国系の屯長と私達二人だけが異民族です。住民の主は満州族の一番外側の種族のゴリート人。老撾子とも呼ばれ、ウスリーで魚をとり、野で貂を求め、少しばかりの雑穀を植え、魚皮の服をまとった者もおりました。髪は茶褐色、瞳は青でした。その人達の四十戸ばかりの部落でございます。

ここが私これから子供を生み育てる天地かと思う間もなくあたりは闇に包まれ、犬の啼き声のほか物音一つ聞こえなくなりました。

夫は警察署に電話がある、私に別室に行けと申します。情勢は大分切迫していると思うのですが、一言も私には話の内容を申しません。月の大半は撫遠に出張しており、月に一回ぐらい手漕ぎの船で帰って来ては、翌朝にはまた戻って行きました。

途中電話で、上司も撫遠に住むようにと勧めてくれると云ってはくれませんが、知らぬ日本人の中に入って気兼ねするより、狭いけれども、ここの方が気楽だと返事をいたしました。私の強がり、わがまま、でございますようか。

そうなるかと急に人恋しくなり、十四、五才の老撾子の娘さんに、その汚いのも我慢して、一緒に寝泊りしてもらいました。洗濯、水

汲みにも老撾子の道具を借りなくてはならず、米や砂糖もひとりでは幾らも要りません。食事と一緒にして身の回りを世話してもらいました。すると少女の父親が河でとれた大きな魚を持ってきてくれるのですがその少女と二人ではとても食べきれませんでした。

ある日、「撫遠の隊長から、新婚の嫁さんをそんな所において、淋しがっているだろうから連れて来いと云われた」と電話がかかってまいりました。

「いいえ、結構楽しく暮しております」と返事をいたしました。……今から考えますと、夫の履歴も、性格も、好みも知らず、ただ夫婦としての愛情が育っていなかっただのかも知れません。

八月八日。撫遠のSさんに話をしたら奥さんも大賛成だから今の所を引き払って撫遠に来るように決めた。今日これから迎えに行く。と夫からの電話を受けました。その夜はここに住みついて三度目の夫を迎えたこととございました。

明日の朝、例の手漕ぎ船で送ってもらおうと、身の

回りの着替えを風呂敷に包み、その外お米を少し持って行く準備をして床につきました。

いつも警官隊の物見櫓には、終夜見張りが登り、何かあると紐を引き、下のベルが鳴るようになっておりました。事務室には半数の警察官が銃を持って仮眠しております。

ところが、その夜はなぜか余りに激しい犬の啼き声に眼を醒ました。住民は狩猟民族ですから、どこの家にも犬はおります。それにしてもその夜の啼き方はいつもと違います。

夫を揺り起こすと、「犬は啼くのが商売だ」と不機嫌に申し、また毛布を被ってしまいました。それでも犬の声は、遠く近く激しさを増します。

でも、夫は起きようといたしません。午前二時頃でしょうか、入り口のドアが激しく破られ、そこに拳銃を構えたソ連兵三人が大声で喚いて立っております。

寝巻の夫が床の下の拳銃を探して構えたところを三つの拳銃が間髪を容れず火を噴き、たちまちに畳の間は一面の血の海になりました。

夫は殺された。その死体が血塗れの姿で私の目の前にあります。

結ばれてから僅か二カ月足らず、当地北満の地に來ても殆ど別居に近い日々、未だに夫の肌の薫も明らかでないせいか……いいえ、違います。何だかこんなことが、何時か起きるかも知れぬ、そんな予感、不安が急に現実になったのでございます。

いつか起きるか、いつか起きるか、それが今急に目の前に起きたのです。遂に。遂に。私は突然の出来事に泣くことも忘れて土間に座り込んでしまいました。

事務室の壁に数人分の水筒が掛かっております。ソ連兵はその紐を外して、私と抵抗しない警官を縛り船に連れて行くと申します。私は寝巻のままです、身つくろいだけはさせてくれと頼み、モンペを穿いて曳かれて行きました。

ソ連快速艇は甲板に座った私達に容赦なく水飛沫を浴びせます。二カ月前一日がかりで漕ぎ上った河を、撫遠に向かって高速で走りまわりました。

ゴリートの若い娘、親身に尽くしてくれた十四歳の彼女と別れを交わす暇もございません。恐れを抱いた青い瞳をじっと見ひらいて私をみつめる少女、あつという間の連行でございました。

警尉の一人は住民に嫌われていたのでしょうか。家族ともども殺されたと聞きました。職務に忠実だったといえぬこともないのにと心が痛みました。

途中、草原に艇を停め訊問が行なわれました。ロシア語の訊問で何を問われていたのか分りません。途中パンを与えられましたが、どうせ殺すつもりなのに白々しいと、もらったパンを河に捨ててしまいました。

そんな反抗的な態度をとっても、もっと攻められるかも知れませんが少しも恐ろしくありませんでした。その日は朝から激しい雨が降り続いておりました。

戦火の撫遠

女は死ななくていいのだ、といわれて日本とは女の扱いが随分違うように思えました。そして再び艇に乗せられ、あつという間に撫遠に着きました。

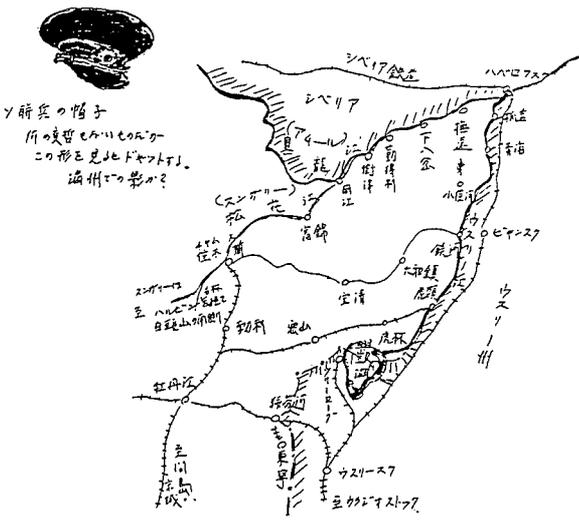
その時の撫遠の空にはソ連の飛行機がなん機も思いのままに飛びかかって爆弾を落とす、河から見る街のあちこちに煙が上がり、女子供の喚き声と犬の啼き声が続いております。

撫遠も日本も、これで永久にこの地上から消えてなくなると思いました。二、三十人の関東軍はまだ抵抗しているのでしょうか。

何人かの捕虜が縛られて艇に來ましたが日本人は一人もおりませんでした。もう一日早く撫遠に來ていれば、私もここで死んでいたに違いありません。百人程の日本人の命はとうなつたのでしょうか。

ソ連領へ

一時間ほど撫遠の地獄絵を見たあと、艇で東に向いました。黒龍江とウスリ江河の合流点でロシアと中国の国境の基点として建てられた交界牌から少し入ったロシア部落に着きました。中国人が二站と呼んでいましたから、交界牌から南に数えて二つ目の部落なのかも知れません。裸足の子供からロシア人の大人まで



ソ連兵の帽子  
何の軍隊なのか、この形を見ればドヤツトソ連兵の帽子か？  
満州の軍か？

船着場に集って縛られたまま牢屋まで歩いて行く私達を物もいわずに見ておりました。

三階建の建物には幾部屋も留置場があり、私は一人で入れられました。翌日また二十数名が連れてこられ牢がいっぱいになりました。私は庭のテントに移され、兵隊一人が見張っておりました。数日たってまた部屋に移され、寝ろと申します。

「板の間でどうやって寝るの」と不平を申しますと、濡れた藁蒲団と汚れた毛布を一枚持って来てくれました。その毛布を体にかけると真つ白な虱の行列が腕から足から競争で這い上って来ました。驚いてその毛布も藁蒲団も外に放り出して、それから椅子に座ったままで夜を過しました。

日本語が少し分る兵隊が来て、パンを食べると申します。ときおりソ連兵が入ってきていやらしいことをしますので、大声で叫び蹴飛ばしてやりました。それを見て大勢の兵隊が集まって来てゲラゲラ笑っておりました。

二週間ここにおりました。もう九月に入ったので

しょう、秋風が身に沁みる頃になりました。今度は四階建の司令部のような所に呼び出され、偉そうな軍人が「お前は撫遠に帰らんか」と申します。

「撫遠には知人は一人もおりません。居たとしてもソ連軍が皆殺してしまっただから、今更行きたいところなんかございません。私は死にたい」と答えました。

「日本は降伏してハルビンも奉天も撫遠も同じだから、その内日本に帰る日が必ず来る」と申します。

「そんなこと、到底信じられません」と申しますと、八月九日の未明以来忘れていた涙が急にこみあげてきて、その場に泣き崩れてしまいました。

### 再び撫遠に

翌朝ソ連の将校に連れられて二站を出発し夜中に撫遠の河岸に着き、河岸にある劉という農家を叩き起こして朝まで泊めるように交渉し、その将校は立ち去って行きました。

今考えても、何故たった一人の日本の女を将校が付き添ってまで満州側に送り付けたかよく分かりません。

その農家は年老いた男ばかりの四人暮りなので、まさかその間に入って横になることも出来ません。木の椅子に寄り掛かって夜を明かしました。明るくなると、外にはソ連兵が大勢いて、女を見ると乱暴するから、迎えに来るまで外に出るなと申します。それを振り切って私は表に出ました。

百人近い日本人が八月の始めに殆ど全員生命を失ったのです。今ここにいたたった一人の日本人として掌だけでも合わせたいと思ったからでございます。

十時頃、中国人に案内されたソ連兵三人が迎えに来て、連れて行かれた先が、夫の勤めていた警察隊の建物あとに置かれたソ連の司令部でした。

河淵からそこまでは大分登り道で、その入り口に待たされている間、生きている日本の女性が珍しいので、扉の前は人の山になりました。でも、その視線は穏やかでした。

町中の人は戦場で死んだ人の後始末と、壊れた家の片付けをさせられておりました。

よく中国語が分からぬ私

なのに、中国の人々がその時のこと、戦いの中のことを熱心に話してくれました。先日まで一緒にこの地に生活していた日本人の最後の様子を、たった一人生き残った日本の女に語りたい何かがあったのでございましょう。

次にその場で聞いた話を記しましょう。

特務機関長伏見進さんの奥さんは、八月四日にお産をして、八日の夜半特務一人が付き添って小舟で脱出しましたが、途中でお子さんは死に、奥さんは富錦でソ連につかまったようです。機関長は、西山部隊(撫遠の守備隊)と一緒に戦い、西門で戦死したのを見た者がいたそうです。

三・四名の日本婦人が晴れ着をきて、電報局に入り、中から鍵をかけて建物に火を付けて自殺したと聞きました。

小林通信士、中国服を着てソ連兵に近付き「自分は中国人だ」と云いながら、拳銃で七、八人のソ連兵を倒しましたが、寒葱溝という所で農民に殺されたそう

です。

四月に佳木斯から着任したばかりの篠原副隊長は、六月に家族を撫遠に呼んでおりました。

九日未明、県公安署に乱入したソ連兵は、副隊長に拳銃を発射しました。気丈夫な副隊長は重傷に屈せず大声でロシア語を叫んでおりましたが、つづく銃声がすべてを消してしまいました。

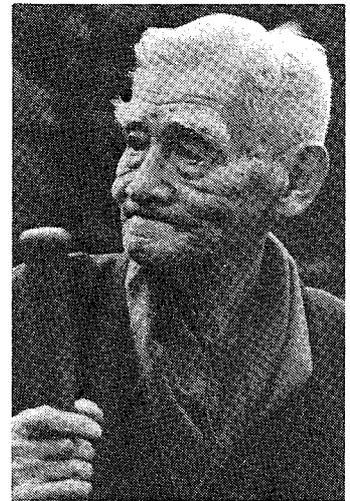
生き残った一般邦人は、子供を含めて土堤の上で銃殺されて黒竜江に放り込まれてしまったそうです。二歳位になる男の子が二人、死体の中から這い出して来るのを近くの中国人が拾ったそうです。その一人は同僚の北山警尉のお子さんではないかと思えます。

日本人は大したものだ、副隊長にしても、婦人達とて、日本の教育は立派なものだと話してくれる中国人の言葉に、同情と尊敬があり、それが以後私がその地に生きる心の支えになったことは確かでございます。

(続)

# 松永安左衛門翁の遺書

田中精一



松永翁の遺書が私の手元にある。甥で翁の後を継いだ安太郎氏、東京電力の木川田一隆氏、中部電力では井上五郎、横山通夫両氏、それに私の五人にあてられたものである。

東京の慶応病院で、翁が九十五歳の生涯を閉じたのは昭和四十六年八月十八日。その二、三日前から私は病院に詰めており、逝去後まもなく横山氏から手渡された。受取人が五人なので、私のは直筆ではなく青焼きのコピーだ。今や健在なのは安太郎氏と私の二人だけになった。ここに、紹介しよう。

『一つ、死後の計らいの事、何度も申し置く通り、死後一切の葬儀、法要はうすくの出るほど嫌いに是れあり、墓碑一切、法要一切が不要。線香類も嫌い。死んで勲章位階(もとより誰もくれまいが、友

人の政治家が勘違いで尽力する不心得かたく禁物)これはヘドが出るほど嫌いに候。

財産は伴および遺族に一切くれてはいかぬ。彼らが墮落するだけです。(衣類など形見は親類と懇意の人に分けるべし。

## 遺書に従い葬儀せず

ステッキ類もしかり) 小田原邸宅、家、美術品、必要什器は一切、記念館に寄付する。これは何度も言った。

つまらぬ物は僕と懇意の者や小田原従業員らに分かち与うべし。借金はないはずだ。戒名も要らぬ。

この大締めは池田勇人氏にお願いする。

以上 遺書の日付は三十六年十一月八日。亡くなる十年前だが、これ以降書かれた遺

書はない。最後に元首相の池田氏に大締めをお願いするとあるのは、同氏が電力再編時の通産相であり、首相になってからも親交を続けていた関係で、遺言の見

届けを頼んだものだろう。ただ池田氏のほうが先に亡くなってしまった。

受け取った遺書を初めて開けた時に、いかにも「翁らしい遺書だ」と思った。生前から「葬式をして喜ぶのはお寺と花屋だけだ」

「俺の葬式をしても、知らない連中が大勢やってきて仕事に滞るだけだ」などとよく口にしていた。遺書もやはり、自分が死んでも葬儀など一切するな、財産は全部寄付しろ、と日ごろの言動そのままを書き記して

おり、その合理主義精神があふれていると感じたからである。 遺言通り葬儀は見送った。小田原市郊外の邸宅(現・板橋小田原市立郷土文化館分館)で通夜をし、翌十七日には市宮火葬場で荼毘(だび)に付して、翁のお気に入りで入った埼玉玉東・野火止の平林寺に埋葬した。

「墓碑も要らぬ」の遺志に従い、土を盛った上に丸い石を一つ置いただけの墓になった。隣にはすでに一子夫人が眠っていた。夫人が亡くなったのは三十三年秋。この直後、翁には当社の松本浅間荘を足場に長野、群馬両県の電源地に視察する予定が入っていた。当然、視察は中止になるだろうと同行する私たちには思っていたが、翁は「葬式などしない。本人に

わかるはずもなく、他人に迷惑をかける」と言って予定通り、視察した。これにはみんな驚いた。

山荘での一夜、仕事の都合でたまたま翁の寝室に行くと、机の電気スタンドの下に亡き夫人の写真がそっと飾ってあった。「いくら頑固に葬儀はしないなどと言っても、夫人を心から大事にされていたのだな」。

夫婦の情愛のこもった翁の姿をそこに見つけ、私は胸が熱くなるのを覚えた。翁との思い出は尽きない。

一年後に葬儀に代えて追悼会を催した。弔問客が絶えず取捨がつかなくなったからだ。

だんだんと翁を知る人も少なくなり、昨年の十七回忌を最後に追悼会の打ち切りを決めた。寂しさは残る。だが、これも「時の流れ」と自らに言い聞かせている。

この稿は、日本経済新聞に連載の中部電力会長田中精一氏「私の履歴書」の平成二年四月廿日付の分を、筆者の了解を得て再録したものである。元のタイトルは「松永翁逝く」。

# 大正・昭和と 著名な文人と交遊のあつた 小田原御幸浜・養生館主

## 西村隆一さんに聞く(六)

### 北村透谷碑について

——建立してから除幕式の間まで、大分間がありませんね。どういう訳ですか。「最初は除幕式をすぐやる積りだったんですよ。」

それは、そのとき福田〔正夫〕さんは、東京にいましたから、東京の方の募金の関係は、福田さんを通して文壇関係者をお願いした訳です。それで福田さんは、除幕式のと看には、こういうことをやるうじゃないか、と行って、こんなもの〔プラン〕を、私のところによこしたんです。福田さんは、いろんな計画を立てています。ところが、それは遂に実現しなかった。何故実現しなかったかというとね、東京の方で募金を始めたのに拘らず、募金の足代とか、いろんな費用がかかり過ぎちゃ

ったんですよ。それで募金もうまく集まらなかったんです。

尾崎さんはこの話を聞いたとき、へそりゃ困ったな」といわれましたよ」

——島崎藤村さんは除幕式に参列されましたか？

除幕式の記念写真には藤村が写っていない。〔小田原史談〕第一三八号(平成元年九月刊)掲載

「参列されませんでした。都合が悪かったようです」

野田宇太郎著『横浜・湘南文学散歩』には、昭和八年六月十八日に、やっと除幕式が行われ、参列者に未亡人美那、藤村等数人を挙げている。この著が元となっているためか、昨年の秋、県立神奈川近代文学館で開催された神奈川文学散歩展「海辺のきらめき」の案内書の「小田原・真鶴・湯河原文学略年表」には、藤村

が透谷碑除幕式に出席したことになっている。このことと、除幕式が行われた年月日は再検討が必要と思われる。

——除幕式に青木林太郎さんが参列されてますが？

「この方は、当時片浦村(小田原市)の村長をされていましたから、根府川石〔記念碑〕のことで奔走してくれました」

——透谷碑が始め小峯の大久保神社の境内に建てられましたのは？

「それは、やっぱり、お父さん(透谷の)が小田原藩士でしょう。大久保神社〔城主大久保忠世と忠貞を祀る〕が適当だろうと、いうことで、そこにした訳です」

### 西村さんの文芸活動

——西村さん、若い頃雑誌の発行なすっていますか？

他にいろいろ文化活動をなすったんでしょね。」「そうですね……この童謡がそうです。」

凸凹黒ちゃんピコウさぎ  
可愛いチョッキに黒ズボ

ン  
お顔もおても真黒で  
長いお耳も真黒け  
くりくりお目めは真白よ

——というんです。講談社の『婦人倶楽部』(月刊誌)に載りました。これに綿貫營さんが作曲、藤原正夫さんが編曲して、キングレコードから出ています。

……これは、大阪中央放送局で、その歌を流したときの使用料金として送ってきた明細書です。放送料として一円八十銭、昭和九年十月四日の放送で、時間としては一分ですが——。

それにしても、その時分は安かったですね。……これは昭和十五年のときに作った『さがみ小田原』の民謡です」

一、城の小田原風見の雲よ  
箱根関所を間近において  
灘に黒潮舞ふところ  
ソリヤドント陣太鼓  
サテモイヨイヨイト  
コ小田原

(以下同)

二、沖の御神火三原のけぶり  
朝の手船か御幸の浜の  
風は潮風南風

三、空はみどりよ千代田つづき  
汗だ力だ初穂のみのり  
鎌を片手に今金次郎  
四、峠足柄麓を見れば

一つびとつの工場の笛  
新興さがみのありや呼吸  
五、枝もたわわな早川蜜柑  
照らす黄金の葉洩れ陽受けて  
六、梅が匂へばロクロも廻る  
寄木細工の名所の見付  
堰門の板橋花もみじ

七、ここに相模の新都の首都  
海と山から産物積んで  
栄えの水先きいさみ唄

「……この発表のときは、吉井勇さん、西條八十さん、いとこの中原綾子が出席してくれました」

この西村さんの新民謡は昭和十五年十二月廿日、小田原町、足柄町、大窪町、早川村、酒匂村のうち山王原・網一色が合併して小田原市が誕生したので、作曲は作詞されたもので、作曲は綿貫營が当たっている。

発表は翌十六年一月廿七日、天守閣広場で市制祝賀会が開かれた時である。当日、市内区長以上の役職者の他、内務大臣代理、県知



事以下の来賓が千余名出席 (大正から昭和の始めにかけ祝賀式のあと、新民謡は、城蹟都踊会員により、綿貫音楽団伴奏で歌われた。また、新舞踊「さがみ小田原」が三光社中により綿貫蒼

小田原詩歌会創立記念写真  
前列左より四人目より右へ西村隆一、藪田義雄、鈴木貫介、小暮次郎の各氏 (鈴木貫介氏所蔵)

「……………これは、小田原詩歌会、発足のときのプログラムです。鈴木貫介君と一緒に会を作ったのです」

プログラムによると、昭和十六年九月十三日、本町国民学校(現本町小学校)講堂で、小田原市、西湘文化連盟の協賛により開かれている。

内容は、三好達治、中原綾子の講演、鈴木貫介氏の朗詠、故小暮次郎氏ら「小田原室内楽団」のメンバーによる音楽演奏で、それに華を添えるように北原白秋と北条秀司が祝辞を寄せている。祝辞を読んだのは藪田義雄だった。

ちょっと付け加えると、三好達治は、当時小田原に在住、鈴木貫介氏が師事した詩人だ。中原綾子は、前にも記したが西村隆一氏の従姉に当たるが、当時、明星派與謝野晶子に次ぐ女流歌人で、鈴木氏によると「綺麗で気品のある人だった」と言う。

西村さんと鈴木氏の交友は、鈴木氏が西村さんの先妻フジ子さんと、親戚であったことから始まっている。話はちょっと外れるが、フジ子さんは、病気のため、

昭和十三年十二月、三十五歳の若さで、六人の子供を残して早死した。西村さんとフジ子さんとの結びつきには、当時、見合結婚が普通であるのに、そこには素晴らしいロマンスがあるが、西村さんと彼女の間をとり持ち仲人となった北原白秋は、その死を非常に残念がって、霊前に歌を電文で寄せている。

香を焚け  
この日海静けきに

この「詩歌会」を始めたことについて、鈴木貫介氏は、

「皆の気持ちがすさんでいたので始めた訳ですが……若かったんですね、三好先生の前で朗詠をやるなんて……それはともかくとして、内容は豪華で、今ならば会場は満員になったでしょうが……」

当日の来会者は、僅かに十数名で、主催者と同数に近い人員だった。時代が悪かったというより他はないだろう。

二回目の「詩歌会」は何カ月か経ってから、上幸田

の松琴楼で開かれた。会する者、西村、鈴木両氏の他に、三好達治、藪田義雄の僅か四名。

三好は激怒した。

「なぜもっと早く二回目の会を開かなかったのか、そのため人が集まらないのだ」と、雷は西村さんの頭上に落ちた。

「私(鈴木)は叱られないでいましたが、三好さんがこんな怒ったことは始めてでした。藪田はしきりに宥め役に廻りましたが……」

ところが、怒りはやがて私に向けられました。たゞ首をすくめてうなだれているより他はありませんでした」

西村、鈴木両氏の意気込んだ目論みとは裏腹に「詩歌会」は、打上げ花火で終わってしまった。

しかし、西村氏が大事に保存されてきた北原白秋や北条秀司の祝辞は貴重なものだ。特に白秋のそれは、彼が如何に小田原を愛し、また、彼の生涯の文学活動に於て、充実した意義の深い一時期であったかを知る一つの資料ともなっている。その祝辞の全文は、紙数の関係があるので次号に紹介したい。(岡部忠夫)

# 地方史研究に注いだ情熱

——内田哲夫の死を悼む——

川 添 猛



在りし日の内田哲夫氏

内田哲夫が死んだ。彼には、果さねばならぬ地方史の仕事が山ほどあって、期待も大きかっただけに、その死はまさに痛恨のきわみというほかはない。また死の直前まで、仕事に執着していたさまは、一種壮烈でさえあった。

彼の最後の仕事となってしまった「小田原市史」近世史料篇の二冊目が、このほどようやく刊行をみたが、実際、病とたたかしながらの仕事であったの

で、責任編集の立場として、思いのどれほどが果せたのであろうか。彼の日頃の仕事に対する執念からして察するに余りある。

それはたとえば、一字一句に気がばりと根気を要する校正作業であったりしたが、病の篤くなったからだには文字どおり苛酷そのものであったにちがいない。

もうひとつは、わたしども図書館の刊行物「御家中先祖並親類書」第二巻の校訂の仕事であった。さすがにこれは、自身で手がけた

いと望んでいながら、ついになかばにも達せぬままになつてしまった。せめて解説の一部である「先祖書」を読むために」の第二巻分のあらたな原稿が八月の末に、病の身に鞭うつようにして書きあげられた。これよりさきわたしは、当初より全巻構成として決定していた各巻の主解説を、最終巻にくり延べするよう彼とは話し合っていたこともあって、おそらくこれが彼の最後の著述に当るのではないかと思われる。

さて、彼の小田原市史編纂への熱い思いは、ゆうに二十年を超える、ながい意識のつながりであった。わたしのかかわりでは、それは図書館における古文書調査が最初の具体的なあらわれだった。公式には昭和四十七年からのスタートとなっているが、実はそれより五年前はさかのぼることのできる独自の活動期間があったのである。独自というのは、公的な経費のともなわない、いわば手弁当の仕事だったというわけで、図書館員のわたしが側面から協力するという

体裁のものであった。

当時は経済成長はなやかな頃で、そのおおりを喰らうようにして地方文書が滅失の危機にさらされていた。わたしたち二人は、所蔵のお宅を訪ねまわっては、熱っぽく古文書保存の大切さを説いていた。

昭和四十六年に入ると、それまでのわたしたちの実績をふまえて、どちらが言い出すわけでもなく、この仕事の今後のことについて相談することになった。彼は、すぐにでも市史編纂事業をはじめべきであると力説してやまなかつたし、一方わたしは、質の高い市史をプロデュースする力が、いまの小田原市には備わっていないので時期尚早であると反論した。たしかに歴史的に由緒ある全国自治体のなかで、小田原市史編纂事業はもっともおくれしていたことは明白なことであった。

同席してくれていた石井富之助氏の助言もあって、ひとまずは図書館において調査活動を従来よりは組織的に進めていこうということに落着いた。そして翌年度には、岩崎宗純、内田清

の両氏もあらたに加わって、正式に図書館予算のなかに事業費を計上して本格的な発足をみたわけである。因にいまの小田原市史編纂事業は、それからさらに十年を経た昭和五十六年にはじまるのであるが、その時点で図書館の古文書調査事業はとりあえず幕を閉じることになった。彼にとつては、小田原市史編纂へのながい前哨戦だったのである。

この間にわたしたちは、調査活動の実践報告ともいうべき、全五冊の所在目録(完結は昭和六十一年)と「江戸時代の小田原」という一般向けの概説書を世に送り出すことができた。

こういった動きと併行して、彼は乞われて近隣各地の市町史を手がけた。その全貌をわたしは詳かにしないが、この仕事へ托した夢の実現のために、御殿場市史の際には数々の新機軸もうち出したりしていたようである。それだけに苦心も多かったにちがいない、その思いの丈や悩みなどかかされることも幾たびかあった。彼はこういった数々の体験を、小田原市史のなかで集約・総括することをみ

内田哲夫の主な著述

- 『御殿場市史』第1巻～4巻 第8巻別巻Ⅱ  
近世関係執筆 発行・御殿場市  
(昭和49年12月～53年10月 56年7月、8月)
- 『根府川の歴史』 共著  
発行・小田原地方史研究会(昭和50年4月)
- 『新編物語藩史』第3巻 分担執筆  
発行・新人物往来社(昭和51年3月)
- 『年表小田原の歴史』 編著  
発行・八小堂書店(昭和53年2月)
- 『小田原の近世文書目録』1～5 分担執筆  
発行・小田原市立図書館(昭和54年10月～61月3月)
- 『小田原藩順席帳』 解説  
発行・小田原有信会(昭和54年10月)
- 『江戸時代の小田原』 共著  
発行・小田原市立図書館(昭和55年3月)
- 『わが町の歴史・小田原』 共著  
発行・文一綜合出版(昭和56年2月)
- 『小田原藩 土農工商の生活史』  
発行・有隣堂(昭和56年10月)
- 『秦野市史』第2巻近世資料1、近世資料統計編1・2  
発行・秦野市(昭和57年3月、63年3月、平成元年3月)
- 『小田原図書館五十年史』 共著  
発行・小田原市立図書館(昭和58年11月)
- 『神奈川県の地名』 分担執筆  
発行・平凡社(昭和59年2月)
- 『湯河原町史』Ⅰ、Ⅲ 近世関係執筆  
発行・湯河原町(昭和59年3月、62年3月)
- 『神奈川県地名大辞典』 分担執筆  
発行・角川書店(昭和59年6月)
- 『神奈川県の歴史』 分担執筆  
発行・有隣堂(昭和61年6月)
- 『小田原地方商工業史』 共著  
発行・小田原商工会議所(昭和61年10月)
- 『藩史大辞典』第2巻関東編 分担執筆  
発行・雄山閣(平成元年11月)
- 『小田原市史』史料編近世Ⅱ、Ⅲ 執筆  
発行・小田原市(平成元年3月、同2年10月)
- 『御家中先祖並親類書』Ⅰ 解説指導・解説  
発行・小田原市立図書館(平成2年1月)

ずからに課していたのであ  
る。  
いよいよ小田原市史がは  
じまろうとするにあたり、  
彼をはじめわたしたちが願っ  
たいいくつかのことがらのな  
かで、いちばん心に残って  
いることは、小田原を中心  
とする地域史の考え方を、  
すくなくとも近世史におい  
て展開してもらいたいとい  
うことであった。近隣市町  
史を多く手がけた彼こそ、  
その最適任者であることに  
異論のあるはずがない。  
ここ数年は、お互いの仕

事の局面がちがってしまっ  
たこと、そして多忙さがそ  
の辺のことについてゆっく  
り語り合えるチャンスを失  
わしめた。  
彼とわたしの、考えてみ  
ればながい交際のなかには、  
書かねばならないことも沢  
山あるかもしれないが、ど  
うやらわたしは一つことに  
こだわったようである。し  
かしいまはこのほかに書く  
ことはない。  
かつて、地方史の研究と  
いうものはその地方になが  
く留まりながら、研究とし

ての水準を保持しなければ  
ならないという意味のこと  
を、彼はしみじみとわたし  
に語ったことがあった。そ  
れは、あるいは大学教師へ  
の転進の話のあった前後の  
ことかもしれない。思わざ  
る運命の糸にあやつられる  
ごとく、蒼惶として逝って  
しまった内田哲夫よ。彼の  
思いの果される時節はいっ  
か到来するのであろうか。  
心から冥福を祈るや切で  
ある。(一九〇・三)

略 歴

- 昭和五年十月十五日  
父内田春蔵、母よねの八男  
として小田原町幸四丁目五三  
番地に生れる
- 昭和十八年三月  
小田原市立小学校卒業
- 昭和十八年四月 東京都海  
城中学校に入學
- 昭和二十年五月 海城中学  
校戦災を受け閉鎖のため相  
洋中学校に転校
- 昭和二十四年三月  
相洋高等学校卒業
- 昭和三十年三月 早稲田大  
学文学部史学科卒業
- 卒業後、神奈川県立吉田島  
農林高等学校に就職、つい  
で同相模台工業高等学校、  
同高浜高等学校に勤務
- 平成二年三月 高浜高等学  
校を退職
- その間  
小田原市文化財保護委員、  
同地名保存検討員、同市史  
編纂専門委員の他、御殿場  
市・秦野市・湯河原町・真  
鶴町の各市町史編纂専門委  
員を歴任
- 平成二年十月七日  
死去 享年五十九歳

## 今ふりかえる

## シベリア抑留

## 初年兵教育

昭和二十年、戦局いよいよ厳しく、南方戦線の拡大で勇躍部隊から転出する戦友たち、櫛の歯が抜けるように征胡台を去ってゆく。こんな或る日、中隊長より声がかかり、

「ハトミ部隊に始めて現役兵が入隊する。中隊にもどって一緒に助教として教育にあたれ。戦争が始まったらどうするか」と命令された。

中隊事務室、部隊炊事と訓練を離れての勤務が多かったので、砲手としては基礎訓練を部隊編成当時にやったきりなので、これも止むを得ないだろう。早速部隊炊事をA伍長と交代して中隊に復帰した。

いよいよ三月、現役の初年兵が入隊してきた。地下足袋に竹の水筒。小銃は五人に一人の割合で所持しての渡満である。戦局もさし

## 齋藤理一

迫った状況にきていることが察せられる。それに現地召集者も入隊してきた。

初年兵教育が始まった。第一班の助教としての毎日の訓練である。助手は誰だったかいまでは思い出せない。初年兵と一緒に今までの訓練である。征胡台も遅い春の訪れを見た。蕾の迎春花もやがてかれんな姿になるだろう。練習途中に目の前に雉の卵か四つ五つ巢の中にならんで入っている。

急ぎばやの三カ月の教育を終り、一期の検閲もどうやら終ってほっとした一時、初年兵は各班に配属された私的制裁もなく静かな内務班であった。

〔註〕ハトミ部隊 迫撃第三大隊の愛称。通称満州第三二〇七部隊。昭和十七年四月、旧満州国チチハルで編成。東満の東安省虎林に駐屯。その地を征胡台と

称した。八月九日、ソ連軍侵攻時牡丹江近くの穆稜陣地で激烈な戦闘をしている。

## 転属

五月下旬となって大きな転属命令が発せられ、部隊より初年兵を中心とした一個中隊分が抽出された。私もその一員である。転属先は適道(露天堀による良質の石炭を産出した処)の新設野砲兵連隊であった。懐かしいの征胡台、ハトミ部隊ともお別れである。同年兵の下士官三名も共に加わった。聞く処によると馬部隊である由、車輛のハトミ部隊とは勝手が違う。しかし命令とあつては致し方ない。編成以来の部隊、戦友ともお別れである。「元気でな、頑張れよな」の声をあとに虎林を出発していった。

## 砲のない迫撃中隊

適道へ到着、ハトミ部隊の木造と異なり、煉瓦造の兵舎であった。

昭和二十年六月十日、野砲兵第三連隊(満州第五四部隊)の編成完結。部隊編成は、第一大隊は騎砲兵大隊、宝清からそのまま移動した六頭だての砲車隊であ

り、第二大隊は山砲、迫撃は第三大隊の馬載である。われわれは第九中隊に所属した。中隊長は騎砲出身の応召された中尉で、迫撃は未経験。騎砲より何名かの兵が配属され馬の扱い方について教えて貰う。しかし砲はない。馬載の演習どころではない。部隊はごったがえした状況に置かれた。

私は人事係を命ぜられ、不慣れた生活が始まった。中隊の編成をみると、騎砲から五名、山砲から十名、ハトミ部隊の初年兵約三十名、内地から直接適道へ到着の初年兵、朝鮮の兵約十名、その他入院患者十五名位、どうみても頼りない中隊である。

中隊人員約百名をそここの砲のない迫撃中隊。毎日が環境整理と馬の世話、演習訓練のない兵の集団である。同じ迫撃の七中隊、八中隊もほぼ同じような編成であろう。

やがて馬に砲を架載する荷馬車六台を受領、厩当番勤務が始まった。初めての馬との出会いである。やっとのことで書類上で中隊人員の掌握が出来上がった。しかし、砲はまだない。

このまま、日ソ開戦ともなれば一抹の不安な予感がはしたが、ここここに至ってはどうすることも出来ない。

## 対戦車壕掘り作業

六月も末近く連隊をあげて戦車壕掘り作業の命令が出た。行く先は大墟山の中腹、地図を見ると穆稜陣地の一つ隣の山らしい。連隊全員、適道を出発した。三日間位の行軍であつたらうか、現地に到着した。幕舎生活で毎日山へ戦車壕掘りの土方作業へと出掛けていった。ソ連の戦車を壕に落とすとして前進を阻止するといふ訳である。

満州の夏は暑い。大陸性気候である。炎天下では三十五、六度はあるだろう。裸でまっ黒になっての作業である。幅が二十メートル深さは十メートルの上はあるだろう。何段か揚げて練りかえし土をあげる。各部隊に割当ての戦車壕、関東軍の偉い人が考えてのことだろうが、果して戦車が落ちてくれるかどうか、我々は懐疑的であった。しかし命令である。夜を日について作業に精を出していた。

相手は独ソ戦で大分国力を痛めている。日ソ不可侵条約が締結されてる今、幹部とて即開戦とは思われ難い、我々としてもそう信じたい。しかもこの戦力で開戦ともなれば、砲のない部隊、初年兵主体の戦いが果してどうなるのか、と、考を巡らしても致しかたないこと、ままよどうにでもなれれのことである。

ソ連軍の侵攻

八月九日、突如としてソ連軍国境突破の第一報が入る。しかし我々には状況は皆目わからない。いよいよ来るものが来た。本来の迫撃砲は受領していない。一部弾薬だけは幕舎に集積してある。

「直ちに幕舎を撤収、戦闘状態に入れ」

の第二報。早々にして第二線戦闘準備、陣地を牡丹江近くの掖河へ布陣のため出発、夜を徹して掖河へ急ぐ。途中路上をハトミ部隊の扇マークの車輛数台が通り過ぎていった。懐かしさが込み上げる。夜も白じら明ける頃、複製の偵察機が頭上すれすれに飛行、慌てて小銃を一斉に「ボンボン」

射つ音がする。それとあざけり笑うかのように機銃掃射、一瞬間をすくめて龜のように。友軍の飛行機は遂に現われなかった。

やがて牡丹江に近くになる。避難民も部隊もごった返している状態を横にみても一路掖河へ。

陣地は第一線が騎砲兵大隊の砲列、第二線が山砲大隊、わが迫撃隊は第三線の布陣となったが砲は一門もない。ここでむざむざ命を落とすのか。

又しても偵察機、低く一巡して対岸へ飛んで行く。僅か三十分もたつたたないうちに敵陣から一斉に砲弾の雨。直ちに個人掩体壕を夢中で掘りあげその中に入る。友軍の砲列からも一斉に火をふいた。すぐそばの十榴砲から砲撃する度に大きく揺すられる地震のような地響き。八月十三日のことである。

翌朝砲眼鏡で前線を覗く。前方に戦車群が長く横一列に並んで侵攻してくる。

友軍の砲弾が命中、黒煙がもうもうと上る。「やっ」と歓声をあげる。しかし、黒煙が土埃が共におさまると、敵戦車群は、ま

た、のろろと動き出し前進する姿をかいま見た。稜線前方の平地に、個人掩体壕で布陣した肉迫撃隊の吸着地雷による攻撃は、相当の戦果を挙げたと聞く。

しかし、その後、敵は戦車の上にマンドリン銃を持った歩兵を塔上させ銃撃作戦により風潰しに壕内の友軍を銃撃してきたという。後日聞くとところによると、肉迫撃隊は、石頭予備士官学校生徒の実戦体験もない六五〇名の学生集団で、使命感に燃え後退せずソ連戦車に対し立ち向い、生き残った者は僅かという。

我々砲なき迫撃隊に、やがて破甲爆雷と手榴弾が届いた。死に直面する場面が刻々と近づいてくる。やがて月の煌々とした夜になった。完全にお手あげ状況である。掩体壕の中で月の光の下で最後の別れと僅かの酒を酌み交わした。同年兵の戸田軍曹が潜り込んで来た。

「……故郷には妻子がいる。なんとしても帰らなくては……。しかしもうこれが最後だ、残念だ」  
彼とは入営以来、転属しても同じ部隊で、しみじみ

懐古話をした。彼の持ってきた恩賜の煙草を吸った。それが戸田との最後の別れとなったのである。

十時を廻ったと思われるとき、部隊命令が届く。

「各中隊から十名斬り込み隊を編成、敵戦車群に内迫攻撃を敢行すべし」

切り込み隊長は第七中隊長のS中尉で三十名。さあ弱った。人選に苦しんだ。

誰を選んでよいものか、心を鬼にして十名を選抜、命令をした。一同集結して編成も終り最後の分れとなる。

日露戦争の旅順二〇三高地の白樺隊もかくあろう。

しかし、わが身とても同じこと、いずれ手榴弾と破甲爆雷の唯一の武器で敵戦車と闘わなければならぬ。

これが最後だ。ふと今日迄のはかない想い出を辿った。中隊書類行李を土中に埋め、馬の手綱を解きほどし放馬した。

その時撤退命令が届いた。

「第二陣地で軍を立て直し横道河子で敵を迎え撃て」

一瞬名状し難い感じだった。斬込隊は解散、各中隊に戻ることにした。

撤収もすみやかに転進が始まった。夜中の行軍である。牡丹江は赤々と燃えていた。その火を横目に一路横道河子へ、ときに八月十五日のことである。

昼夜を分たずの行軍であった。身につけているものは、僅かの乾パンと手榴弾と破甲爆雷、それに帯剣だけ。

とき折敵機の急降下爆撃と機銃掃射、道路際に兵の死体が散乱していて、既に蛆がわいているものもある。負け戦の悲惨さを見せつけられ、思わずこみあげるものがあり合掌した。隊長は足を負傷してびっこをひいて

いる。手をとり合って横道河子の山中に辿りついた。

雨がしとしと降っている。あちこちに兵隊がいっぱいだった。果してこの先どうなるのか不安は一層募るばかり。木陰で一夜を過す。

無条件降伏

明けるとよい天気になっていた。

あたりからざわめきとも聞える何となく異常の賑やかさが伝わってくる。

命令が伝達された。「我が軍は無条件降伏せり」頭をガンと一発くらった

ような感じがした。遙か下の満鉄の無蓋車にはソ連軍が乗っているのがよく見えた。敗戦である。今まで負けたことがない日本軍、栄光の関東軍は完全にお手あげ、『戦陣訓』の「生キテ虜囚ノ恥ズカシメヲ受ケズ」は？ この先はどうなるのか。一抹の不安の中に、こ

れから先が思いやられる。戸田軍曹もついに姿を見せなかった。朝鮮の兵隊は既に姿を消していた。武装解除、兵器撤収となった。中隊毎に集積してソ連に引渡すことになる。爆薬、小銃、帯剣、軍刀等一個所に集積した。それを無造作に積みこんだ。中隊は松永見習士

官が指揮した。前方で大きな爆発音がし砂塵が舞う。すぐ現地へとんだ。硝煙の臭いが鼻をつく。兵隊も馬も車もない。車共々吹き飛んだという。小さな肉片が散乱して何ともむごい状況であった。破甲爆雷の安全栓が抜けたのか、原因は分からない。戦いが終って緊張

感が失われてからの出来事である。この見習士官は母と子の二人暮しだそうだ。何と悲痛なことであろう。今でもその母の心情をしのび時折思いだす。いくつかの肉片を集めて埋葬し冥福を祈った、戦争が終ったというに。

うなることか、どう展開していくのか、運があればいつか祖国へ帰れるか、父母の顔が浮ぶ。兄弟とも再開できるだろうか。故国は今戦に破れてどうなっているか、思いは次々と頭の中を巡っていた。

捕虜生活

山の中から続々と夏衣のボロ服を着た兵隊が集まってきた。敗残兵そのものである。集結も終り行く先は梅林と示された。足どり重く有刺鉄線の張り巡らされた収容所へと入った。捕虜生活が始まった。南から一装用の冬服を背負った戦闘をしなかつた部隊が到着してきた。やがて収容所は満杯となった。

丹沢の植物

⑥

城川四郎

ウマノスズクサ科には前号で紹介したタンザワウマノスズクサなどのウマノスズクサ属のほかにフタバアオイ属、ウスバサイシン属、カンアオイ属という比較的よく似ている仲間がある。ウマノスズクサ属の植物がつかれる植物はどれも地面にはりつくように生え、地中にもぐらんばかりに低く花を着ける。そのため種子はいつも株元に落ちるだけで遠くへ運ばれることがない。だから、広い面積に生え広がるには長い時間がかかる。カンアオイ類についての学者の試算では一万年かかってやっと一キロ

メートルの分布速度であろうという。それで他の地域の仲間を交わり合うことがないために地方、地方によって少しずつ変異しているものが多い。ここにご紹介するのはそのうちで丹沢山塊南西面に分布するズソウカンアオイについてである。この植物は初め伊豆半島で発見されたが、箱根に多く分布するオトメアオイに大変よく似ているため、両者は混同されることが多かった。近年の研究で両者の相違が明確になり、その分布域も詳細に調べられた結果、ズソウカンアオイは伊豆半島から箱根の北側を回って西丹沢、塔の岳南面の山麓

に分布し、箱根に分布するオトメアオイとは完全に住み分けていることがハッキリした。両者は外形的にはそっくりに見えるがオトメアオイは一年おきに花と葉を交互に着け花は初夏に開くのに対し、ズソウカンアオイは毎年、花と葉を着け秋になって花を開く点で明らかに違いがある。もっとも

も花は形を変えずにそのまゝ果実になるので注意深く見ないと、いつ咲いたのか気がつかないことがある。カンアオイ類は常緑で葉の紋様の面白いものが多いので徳川時代には園芸用品として喜ばれ、また希少な蝶としてマニアに狙われるギフチョウの食草としても有名である。

ズソウカンアオイ (うまのすずくさ科)

Heterotropa savatieri

S S P. Pseudosavatieri

(F. Maekawa) Sugawara



筆者原図

そのうち千名単位の大隊で編成されシベリア經由日本行と言う集団が収容所を後にして行く。だんだんと気候が移り変わり冬を迎える寒さが身にしみて来ている。食糧調達で脱糶すると、朝鮮人、満人が三八式歩兵銃を突きつけて威嚇する。なんと哀れなことであろう。

(続)



特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店  
 小田原銀座 アオキ画廊  
 足柄香粧株式会社  
 飛多屋  
 紳士服のアメリカヤ  
 画材 ガクブチ むうえ  
 伊勢治書店  
 かまぼこ  
 株式会社 江島  
 株式会社 小田原魚市場  
 小田原ガス  
 小田原信用金庫  
 小田原報徳自動車  
 株式会社 オートセンター・スギヤマ  
 小田原中央青果株式会社  
 オリオン座  
 かまぼこ籠 清苑  
 令学苑  
 鐘紡株式会社小田原工場  
 力オボウ化粧品鴨宮工場  
 かみやま小児科クリニック  
 興電社  
 小伊勢屋  
 正榮堂  
 中華料理 昇玉

鈴木 廣木まほこ  
 反寿堂スポーツ  
 大営不動産  
 割烹 ぶる ぼ  
 二宮  
 茶半家具株式会社  
 ちんぎょう本店  
 角田ガクブチ店  
 東京電力(株)小田原営業所  
 株式会社 東華軒  
 トーホー建物整頓店  
 八小堂書店  
 八子マサ店  
 平井書  
 富士写真フィルム(株)小田原工場  
 株式会社 報徳  
 松坂屋  
 丸マルク  
 学生専科  
 食器の店 マルサンストア  
 株式会社 美濃屋吉兵衛商店  
 みみづく幼稚園  
 ヤオマサ株式会社  
 山口菓子舗  
 湯浅電池(株)小田原工場

保為雄、和田登、尾崎昭三、中  
 村俊郎、石井鮎子、湯川玲子、  
 田口鏡子、山口一夫、吉崎ヨシ  
 江、内田美枝子、岡部忠夫、若  
 杉久雄、岩本宣明、草場キヨ、  
 岡田美代子、川口とみ、天野京  
 子、瀬戸行雄、渡邊松太郎、柳  
 下京子、府川綾子、芹沢夢子、  
 今川徳子、矢野八重子、関野梅  
 子、井上登美子、平岡ツヤ、下  
 田信子、小沢勇一、加藤カホル、  
 石井美代子、露木桂子、川村八  
 千代、奥津ウタ子、日比野反吉、

露木澄子、梶久子、石川トヨ、  
 森田文子、橋本正美、鈴木恒男、  
 三笠清治、青木君子、梅津クニ、  
 川合昌子、吉川保、小泉邦夫、  
 佐竹きくの、鈴木了、鈴木恒男、  
 高橋佐年、高野孝、橋本正美、  
 三笠清治(敬称略)

落穂集

りを頂きましたが、音声を文字  
 化するのをなんと言うのか、  
 あちこちに当りました。「書取  
 り」や「記録」ではびびったりし  
 た感じでありません。  
 更に調べるうちに聞きなれな  
 いですが、「テープ起し」とい  
 う言葉がかなり広く用いられて  
 いるのを知りました。気安く親  
 しみの持てそうな言葉です。し  
 かし、文字として視覚的にとら  
 れると、どうしても落ちつきま  
 せん。そのうち、ある出版社で  
 「反訳」という言葉を用いてい  
 ることが分りました。これは新  
 造語ではなく、国語辞典に「一  
 度翻訳されたことばを、またも  
 とのことばにもどすこと。ある  
 いは速記された言葉を普通の文  
 字に書き直すこと」とあります。  
 「テープ起し」と「反訳」と、  
 これから先どちらが定着するか  
 分かりませんが、本会報では「反  
 訳」という言葉を取りあえず使っ  
 てみました。テープを反覆くり  
 返し再生し、要約(訳)しての

意味もこめて。

◎言葉というと、前々号でこの  
 欄に「店長」と「物流」という  
 言葉が国語辞典のついでにない  
 と、とりあげましたが編者の不  
 明で、最近の国語辞典には採録  
 されています。なお前述の「テー  
 プ起し」は、まだ載っておりま  
 せん。この点は請合いです。

◎苛酷な強制労働により六万余  
 の死亡者を出したシベリア抑留  
 については、日ソ交渉に当って  
 避けては通れない問題です。齋  
 藤理一氏の「今ふりかえるシベ  
 リア抑留」は、迫撃第十三大隊  
 に所属した仲間による、「征胡  
 台——青春を戦火に奪われた私  
 達の記録」に掲載されたもので  
 すが、この部隊に所属した一部  
 の者しか知ることの出来ない内  
 容ですので、ここに紹介いたし  
 ます。小田原でもこの部隊に所  
 属した者が数名おり、ソ連軍と  
 の戦闘で戦死した者もいます。  
 なお、筆者の齋藤氏は、昨年十  
 月に死去。もっと早く掲載すべ  
 きだったと悔やまれてなりません。

◎岩崎宗純氏の「小田原の浮世  
 絵」、西山鍾太郎氏の「相州曾  
 我岸村と天津神社」、飯田悟郎  
 氏の「古墳遍歴」、岡部忠夫氏  
 の「紅蓮洞・坂本易徳」は都合  
 により次号以下に掲載します。  
 ◎次号は三月発行の予定です。

(陶生)